

生活圏にみる高年者の時間的展望

Time Perspective in the Aged Reflected in “Living-Sphere”.

川崎 友嗣 *
Tomotsugu Kawasaki

I. はじめに

1. 時間的展望について

われわれは、過去によってだけでなく、未来によっても規定されている。未来に対して目標や理想を揚げ、その実現を目指すことは、未来を志向することによって、現在のあり方が変わり得ることを示している。現在の自分は、過去があったからこそ存在するわけであるが、同時に、未来があると信じるからこそ現在の自分があるともいえるであろう。過去を回想し、未来を展望することは、現在の意識や行動に大きな影響を与えていると考えられる。ここでは、過去や未来が実在するかどうかということよりも、人間は過去や未来を主観的に体験することができ、その心理学的過去や未来が、意識や行動に影響するということが重要である。したがって、時間的展望 (time perspective) は、意識や行動を理解する上で、きわめて重要な概念であると思われる。特に老年期においては、一般に、過去の時間に生きているとか、死の接近とともに未来が縮小したり、未来像が否定的になるとみなされがちなので、高年者の意識や行動を理解するには、時間的展望の検討が必要になってくると思われる。

時間的展望の概念規定は、研究者によって異なっており、必ずしも共通の理解が得られているわけではない。時間的展望の概念を初めて提唱したといわれる Frank, L.K.の考えにしたがって、Lewin (1951) は、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」とし⁽¹⁾、Hultsh & Bortner (1974) は、「現時点で知覚された地位との関連における過去および未来の評価」としている⁽²⁾。この2つは代表的な定義であるが、前者は時間的展望の認知的な側面を定義したものであり、後者は情緒的な側面を定義したものであるといわれる⁽³⁾。本研究においては、時間的展望を幅広くとらえ、認知的側面と情緒的側面を含むものとして考えたい。

ところで、実証的研究に関しては、未来時間展望を扱ったものが多いが、そこでは時間的展望の広がり (extension) という量的な側面が中心的な研究テーマとなっている。老年心理学の分野では、Butler (1963) が「ライフ・レビュー (life review)」⁽⁴⁾ の概念を提唱し、過去回想 (reminiscence) に新たな見解をもたらして以来、老年期の適応に及ぼす過去回想の機能に関心がよせられている。過去回想は、過去時間展望の概念に含まれるものと考えられるが、ここでも回想の頻度と情緒的側面との関連を扱っ

* 生活学科

た研究が多く、やはり回想の量的な側面に重きがおかれている。

このように、未来に関しても過去に関しても、時間的展望の量的な側面の研究が中心となっており、質的な側面、特に過去回想や未来展望の内容そのものに対する検討は不十分であるように思われる。これには、時間的展望の内容を記述したり分類したりする、適切な指標や枠組が見当たらないことも関連しているのではなからうか。そこで、本研究は、次に述べる生活圏の概念を用いて、時間的展望の内容を検討しようとするものである。

2. 生活圏について

われわれの意識や行動は、その主体者である自我が、生活の場において様々な対象に関わる時に生じると考えられる。意識や行動を生じさせる対象は、物質的・身体的な対象、对人的な対象、社会的な対象、さらには個人内に存在する内在的な対象と、きわめて広範囲にわたっている。このような、自我に関わる様々な対象を生活圏 (living-sphere) と呼んでいる。

生活圏という概念は、パーソナリティの基本的特性としての行動形態を、空間的な形態から捉えようとする三島(1978, 1983など)のMetal distanceの研究において提唱されたものであ

表1 circleの定義と

生活圏	定義(分類基準)と分類例
1) 自然的生活圏	
物質圏	個人に関わる物質的、物理的な対象からなる 具体的には様々な個人の所有物や土地、建物、経済的問題などが含まれる ex. 手芸・革細工など物を作る趣味、住宅問題、金儲け、車・バイク、おいしい食べ物、老人ホームの費用、ギャンブル、ショッピングなど
身体圏	個人に関わる身体的な対象からなる 具体的には健康や体力の問題、身体的変化、スポーツ、服装などが含まれる ex. 体操、スポーツ、健康や体力の維持、肉体的な若さ、傷病、遭難、事故、容貌、スタイル、美容、ファッションなど
共生圏	個人に関わる生物的、自然的な対象からなる 具体的には動物や植物、自然現象などが含まれる ex. 小鳥の世話、植木いじり、自然に親しむ、夕焼け空の美しさ、生け花、自然環境の破壊、植物の研究、家庭菜園、富士山頂の景色など
2) 对人的生活圏	
家族圏	個人に関わる家族や親族などの対象からなる 具体的には親や子、兄弟姉妹、配偶者、親戚などが含まれる ex. 子供の成長、子供の将来、親(子供)との同居問題、家族で外出、離婚、親の死、子供の死、配偶者の死、子供に迷惑をかけたくないなど
近縁圏	個人に関わる友人や知人などの対象からなる 具体的には友人や特定個人、近所の知人、対人関係一般などが含まれる ex. 友人とのつき合い、異性とのつき合い、人間関係がよくなった、友人がたくさんできた、恋愛や失恋、友人の死など
職業圏	個人に関わる職場や学校、あるいは職業や学業に関する対象からなる 具体的には職場の人間関係、仕事上の問題、学校生活などが含まれる ex. 仕事上の成功、仕事がうまくいかない、職場でのトラブル、就職、転職、勉強、学校生活がよかった、大学の文化祭、アルバイトなど

る^(5,6)。生活圏は、生活の場において生じる個人の意識や行動を捉える一つの指標であり、また生活の場に反映される自我の領域を捉える一つの指標でもある。したがって、生活圏の概念は、これを意識や行動を規定する場として捉えるならば、Lewin (1936) のいう「心理学的生活空間」⁽⁷⁾と類似するものであり、また自我論的な立場で捉えるならば、James (1891) の唱えたいわゆる「客我論」⁽⁸⁾と類似するものである。Lewinはより環境に近い側の観点に立ち、Jamesはより自我に近い側が観点に立っているが、生活圏の概念はこの双方を含むものである。

生活圏は、4つの sphere, 12の circle から成っ

ている⁽⁹⁾。第一の sphere は、物質的・物理的な対象や身体的対象、生物的对象・自然的対象などから成る自然的生活圏であり、物質圏・身体圏・共生圏という3つの circle が含まれる。第二は、家族や親族、友人や知人、職場や学校などから成る対人的生活圏で、家族圏・近縁圏・職業圏がこれに含まれる。第三は、地縁圏・公衆圏・国家圏を含む社会的生活圏で、地域的な対象、公共的な対象、国家的・社会的な対象などから成っている。第四の sphere は、内在的生活圏で、自分自身や想像の世界、価値の世界などから成り、宇宙圏・超自然圏・価値圏を含んでいる。各 circle の定義については、表1に

各 circle の分類例

生活圏	定義（分類基準）と分類例
3) 社会的生活圏	
地縁圏	個人の関わる地域的な対象からなる 具体的には町や村、居住地域、老人ホームや福祉センターなどが含まれる ex. 故郷のこと、転地、地域の活動、ホームやセンターのクラブや行事、地域社会に貢献したい、故郷を離れたこと、ホームの待遇など
公衆圏	個人の関わる公共的な対象からなる 具体的には道路や乗り物、公共的な場、風俗・習慣などが含まれる ex. 旅行、ボランティア活動、礼儀知らずの人がふえた、便利な世の中になった、他の人の役に立ちたいなど
国家圏	個人の関わる国家的、社会的な対象からなる 具体的には日本という国家や社会的現象などが含まれる ex. 政治・経済、老人福祉政策、教育問題、日本の将来、世界情勢、国や社会に迷惑をかけたくない、平和な世の中になったなど
4) 内在的生活圏	
超自然圏	個人の関わる自分自身や想像、空想の世界などからなる 具体的にはパーソナリティ的側面、死後の世界などが含まれる ex. 人間的成長、自分らしさ、ご先祖、死を迎える心の準備、昔の自分、将来の希望、みずみずしい感性、向上心、好奇心など
価値圏	個人の関わるその個人にとっての絶対的な価値の世界からなる 具体的には信仰や信念、人生観や価値観などが含まれる ex. 信仰の心、日本人としての心、自分の喜びの中に生きたい、創造の精神、自己実現、自己を表現すること、自分の信念など
分類不能	ex. 趣味、テレビ、映画、読書、音楽、いろいろのこと、自由である、1日を有効に使う、多くのことに興味を持つ、遊び、充実している、生活全般、熱中できること、苦勞したい、のんびりしているなど

示した。このような生活圏の分類は、時間的展望の内容を捉える有効な指標にもなり得ると思われる。

3. 本研究の目的

高年者の意識や行動の理解を目指し、時間的展望の検討を試みる。今回は、生活圏のカテゴリーを用いて、従来あまり取り上げられなかった時間的展望の内容について検討し、高年者についての特徴を明らかにすることを直接の目的とする。そのために、高年者を群として捉え、若年群や中年群との比較を行ない、また高年群における性、年齢段階、居住環境による差についても検討する。

なお、本研究においては、現在を反映する生活圏を現実的生活圏、心理学的過去および未来を反映する生活圏を、それぞれ回想的な生活圏、展望的生活圏と呼ぶことにする。

II. 研究の方法

1. 対象者

若年群は、18～24歳の大学生160名（男性95名、女性65名）、中年群は30～59歳の189名（男性85名、女性104名）、高年群は62～98歳の245名（男性110名、女性135名）であり、各群の平均年齢は、19.3歳（SD=1.0）、45.4歳（SD=7.5）、77.0歳（SD=6.9）であった。高年群を75歳を境界として年齢段階に分けると、75歳以下の young-old が102名、76歳以上の old-old が143名となっている。また、居住環境からみると、福祉センターを利用する在宅の高年者122名、軽費老人ホームA型（軽費）の入居者56名、および特別養護老人ホーム（特養）の入居者67名の3群に分けられる（施設入居者は、合わせて123名）。

なお、高年群の対象者は、心身ともに比較的健康で、日常会話が十分に成立する者であった。したがって、いわゆる寝たきり老人や、明らかに dementia と診断されるような高年者は含まれていない。ただし、杖歩行や歩行器を使用す

る者が16名おり、特養の入居者の中には、車椅子を使用する16名が含まれていた。また、配偶者が存命の者は、在宅者では41.8%を占めるが、施設入居者では80.5%が死別または離別によって配偶者を失っており、配偶者が存命の者はわずかに13.0%であった（残りの6.5%は未婚）。配偶者を失った者について、死別・離別後の経過年数をみると、平均22.3年（SD=15.7）であるが、男性の平均13.4年（SD=10.2）に対し、女性は倍の26.1年（SD=16.1）となっている。これは、平均寿命の差や夫婦間の年齢差に加え、戦争で夫を失い、再婚しなかった女性が相当数いることによると思われる。以上の点や学歴、職歴などからみて、高年群の対象者は、特殊な集団ではないと判断される。

2. 質問項目

時間的展望の測定技法には様々なものがあるが、時間的展望の内容をみるためのものとしては、Event Test⁽¹⁰⁾ や Experiential Inventory⁽¹¹⁾ が知られている。これらは、将来起きると思われるできごとや人生において重要な体験を自由にあげる技法であるが、あげられたイベントが、本人にとってどの程度意味のある問題であるのかは、不明確であるという指摘もある⁽³⁾。

そこで本研究においては、興味・関心、生きがい、劇的な思い出、将来への希望などの項目を設定し、その個人にとってなるべく自我関与の高いことがらや、印象深いできごとを尋ね、回答を生活圏に分類することによって、過去回想や未来展望の内容を検討しようと試みた。具体的な質問項目は、表2に示した通りである。回答は自由回答形式とし、様々な生活圏に関する叙述が得られるように、質問文の表現はなるべく具体的にせず、回答の方向づけを行なわないように配慮した。なお、Q10は未来時間展望の長さを最も端的に尋ね、時間的展望の量的な側面を検討しようとしたものである。

表2 現在・過去・未来に関する質問項目

No	質問項目
<現実的生活圏>	
Q 1	今一番興味があるのはどんなことですか
Q 2	最近の生活で楽しいと思うのはどんな時ですか
Q 3	現在生きている張り合いはどんなことだと思いますか
<回想的生活圏>	
Q 4	今までの人生では何歳から何歳の頃が一番よかったと思いますか それはなぜですか
Q 5	今までの人生で劇的だったと思うのはどんなことですか
Q 6	今までの人生でやり残したと思うのはどんなことですか
<展望的生活圏>	
Q 7	これからの人生でぜひやってみたいと思うのはどんなことですか
Q 8	将来のことについてよく考えるのはどんなことですか
Q 9	年をとっても失いたくないのはどんなものですか
<未来展望の長さ>	
Q 10	何歳くらいまで長生きしたいと思いますか

3. 手 続

若年群と中年群には質問紙調査、高年群には面接調査を実施した。面接はすべて個人面接であり、定められた項目に基づいた、いわゆる structured interviews であったが、より有効な資料を得るために、自由面接的な要素も取り入れ、回答者が程度自由に話せる雰囲気を作るよう配慮した。なお、面接者には、すべて筆者が当たった。

4. 実施期間および実施場所

若年群の質問紙調査は、2大学の3学部で実施した、中年群は、特定の集団に所属する対象者ではなかったため、適宜実施するという形をとった。高年群の面接調査は、在宅者に関しては東京都の同一区内の3カ所の福祉センター、施設入居者に関しては東京都および近県の軽費老人ホーム2カ所と特別養護老人ホーム3カ所において実施した。実施期間は、1987年8月から11月であった。

Ⅲ. 結果と考察

1. 分析の方法

Q 1～9 で得られた自由回答の内容を吟味し、これを生活圏に分類した。今回の回答には宇宙圏に分類される叙述がなかったため、circle から宇宙圏を除外した。したがって、すべての回答は、11の circle と分類不能を合わせ、12のカテゴリーに分類された。分類の基準と分類例を表1に示した。

一見すると同様のカテゴリーに属すると思われる回答であっても、自我の関わる対象という観点から、どの circle に対する志向性が示されたのかを考慮すると、微妙な違いによって異なる生活圏に分類されることがあり得る。そこで、分類に際しては細心の注意を必要とした。

例えば趣味的活動に関する回答において、単に物を作るのが楽しいという場合には物質圏に分類し、作った物を孫にあげるのが楽しみという場合には家族圏とした。またスポーツや健康維持活動の場合には身体圏とし、福祉センター

や老人ホームでのクラブ活動は地縁圏に分類した。旅行に関する趣味も多かったが、旅行そのものが楽しみという場合は公衆圏、友人との旅行は近縁圏、家族旅行は家族圏、旅行で自然に触れるというような場合には共生圏とした。読書、テレビ、音楽というだけで、具体的な趣味の内容が明らかでない場合には分類不能とせざるを得なかった。

高齢群では、センターやホームに関する回答が随所でみられたが、前述のクラブ活動のように、センターやホームという生活の場に対するコミットメントや、そこにおける不特定多数とのつき合いが示されている場合には地縁圏とし、特定個人との個人的なつき合いであることが示された場合は近縁圏とした。

高齢群は個人面接であったため、追加質問による確認も可能であり、発言の文脈や背景が了解しやすく、生活圏の分類は比較的容易であった。しかし、質問紙を用いた若年群と中年群では記述が具体的でなかったり、不十分だったり、文脈や背景が了解しにくく、そのために分類不能となる回答が少なくなかった。なお、すべての回答に無記入であった若年群の2名、中年群の20名は生活圏の分析から除外した。またQ4については、人生における最良の時期の理由についてのみ分析の対象とし、時期については扱わなかった。

2. 各群の生活圏の比較

Q1～3, Q4～6, Q7～9の質問で得られた回答を生活圏に分類し、その出現頻度を3項目ごとに合計したものを表3および図1～3に示した。表3はsphereのレベルでみた頻度、図1～3はcircleのレベルでみた頻度である。

(1) 若年群の生活圏

頻度の高い生活圏をcircleでみると、現実的生活圏では①近縁圏(31.7%)②物質圏(11.2%)③職業圏(9.3%)、回想的な生活圏では①職業圏(22.4%)②近縁圏(14.9%)③身体圏(12.9%)、展望的生活圏では①職業圏(27.3%)②近縁圏(15.2%)③超自然圏(13.9%)の順であった。(図1)。

また、頻度をsphereでみると、現実的、回想的、および展望的生活圏のすべてにおいて、1位は対人的生活圏、2位は自然的生活圏であった(表3)。表3に基づき、現実的・回想的・展望的生活圏における各sphereの出現頻度の差を検定したところ、全体としての有意差が認められた($\chi^2=118.41, df=10, p<.001$)。

現実的生活圏では、対人的生活圏が最も高かったが、これは近縁圏が高かったためであり、友人との関わりが現在の生活に大きな位置を占めていると思われる。対人的生活圏に次いでいるのは自然的生活圏であるが、これは身体圏や物質圏に分類されるスポーツや自動車、バイクな

表3 各生活圏の出現頻度

()は%を示す

		自然的	対人的	社会的	内在的	分類不能	なし
若年群	現実的生活圏	90(19.5)	197(42.7)	35(7.7)	38(8.3)	65(14.1)	35(7.6)
	回想的な生活圏	64(14.3)	177(39.3)	30(6.7)	15(3.3)	67(14.9)	97(21.6)
	展望的生活圏	75(16.5)	225(49.5)	29(6.3)	69(15.2)	32(7.0)	24(5.3)
中年群	現実的生活圏	102(21.2)	242(50.3)	52(10.9)	14(2.9)	47(9.8)	24(5.0)
	回想的な生活圏	32(7.0)	230(50.6)	16(3.6)	10(2.2)	44(9.7)	122(26.9)
	展望的生活圏	141(31.0)	130(28.6)	46(10.2)	59(13.0)	42(9.2)	37(8.1)
高齢群	現実的生活圏	165(22.5)	129(17.6)	237(32.3)	24(3.3)	36(4.9)	144(19.6)
	回想的な生活圏	70(9.6)	362(49.2)	45(6.1)	8(1.1)	12(1.6)	238(32.4)
	展望的生活圏	195(26.5)	149(20.2)	66(9.0)	74(10.1)	16(2.2)	235(32.0)

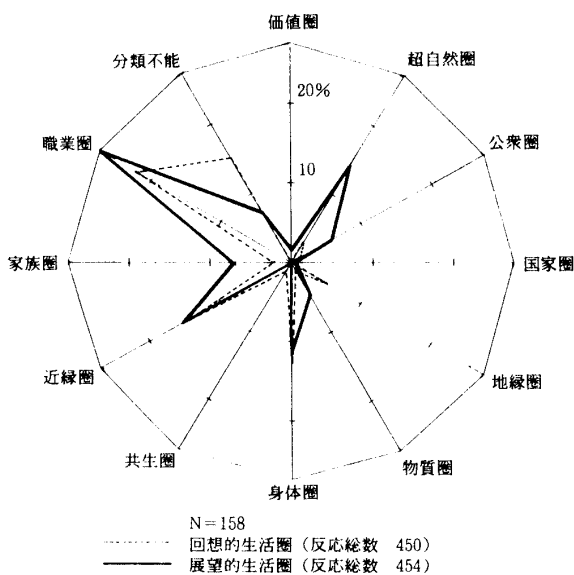


図 1

若年群の回想的生活圏および展望的生活圏

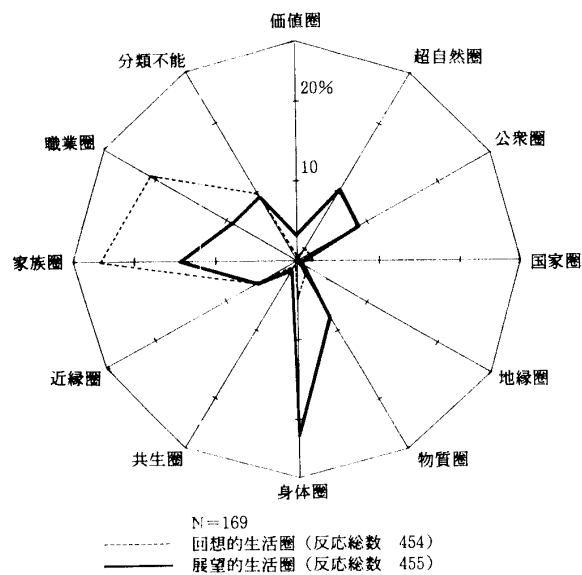


図 2

中年群の回想的生活圏および展望的生活圏

者の過去回想が未来展望に比べて少ないことを示していると思われる。

展望的生活圏では、対人的生活圏が最も高く、また他に比べて内在的生活圏の頻度が高い点に特徴的がみられる。対人的生活圏が高かったのは、就職の問題をあげる者が多く、職業圏が非常に高いためである。対象者のほとんどは大学1年生であったが、近い未来の展望として、就職の問題は大きいものと思われる。内在的生活圏が比較的高かったのは、Q9で超自然圏に分類される、精神的・価値的な内容の記述が多かったためである。

(2) 中年群の生活圏

生活圏の順位をcircleでみると、現実的生活圏では①家族圏 (33.9%) ②身体圏 (13.1%) ③職業圏 (8.5%)、回想的生活圏では①家族圏 (24.2%) ②職業圏 (20.7%) ③近縁圏 (5.7%)、展望的生活圏では①身体圏 (22.0%) ②家族圏 (14.1%) ③超自然圏 (10.1%) であった。(図2)。

頻度をsphereでみた場合には、現実的および回想的生活圏においては、対人的・自然的生活圏の順であるが、展望的生活圏においては、逆に自然的・対人的生活圏の順であった(表3)。各sphereの頻度の差は、全体として有意

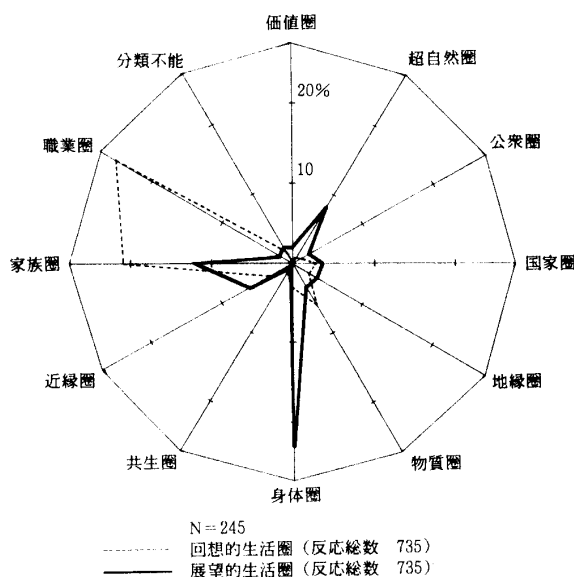


図 3

高年群の回想的生活圏および展望的生活圏

どの趣味をあげた者が多かったためである。

回想的生活圏では、対人的生活圏が最も高く、現実的生活圏や展望的生活圏と比べて、「特になし」という反応(無記入とは区別される)が多い点の特徴的である。対人的生活圏の中では、近縁圏よりも職業圏が高い。これは、学校生活に関する記述が多かったためであり、大学生の過去回想においては、学校生活が大きな比重を占めていると思われる。また、「特になし」が比較的多かったことは、量的にみるならば、若年

であった ($\chi^2=276.27$, $df=10$, $p<.001$).

現実的生活圏では、対人的生活圏が最も高いが、中年群の場合には家族圏が圧倒的に多く、興味・関心や生きがいに関しては、家族という場が生活の中心になっていると思われる。対人的生活圏に次ぐ自然的生活圏では、身体圏が多く、趣味的活動としてスポーツをあげる者が多かった。

回想的生活圏においては、対人的生活圏の頻度が最も高く、他と比べて自然的生活圏と社会的生活圏の頻度が低く、「特になし」が多い点に特徴がみられる。対人的生活圏の中では、家族圏と職業圏が高いが、家族圏はQ4と5に多くみられ、内容的には結婚や子供の誕生、子供の成長などに関する記述が多かった。一方、職業圏はQ6に多く、やり残したこととして学業や仕事上のことをあげる者が多かった。このように、中年群の過去回想の内容は、家族や広義での仕事を中心であると思われる。しかし、「特になし」が比較的多く、若年群と同様に、過去回想は未来展望に比べて少ないといえよう。

展望的生活圏においては、自然的生活圏が最頻であり、他と比べ内在的生活圏が高く、対人的生活圏が低い点に特徴がみられる。自然的生活圏が高いのは、Q8や9で健康や体力の問題についての記述が多くみられ、身体圏が非常に高いためである。中年群は、健康や体力の衰えを自覚しはじめる時期にあるため、やがて迎える老年期においても健康や体力を維持したいとする願望が反映されたのではないと思われる。対人的生活圏は自然的生活圏に次いでいるが、家族圏が高いためであり、特にQ8で子供の将来についての記述が多くみられた。このように、中年群の未来展望は、自分自身の健康の問題や子供の将来の問題が中心であると思われる。

(3) 高年群の生活圏

生活圏の出現頻度をcircleでみると、現実的生活圏では①地縁圏(24.2%)②身体圏(15.1%)③家族圏(9.0%)、回想的生活圏では①職業圏(25.4%)②家族圏(20.7%)②物質圏(5.9%)、展望的生活圏では①身体圏(23.9%)

②家族圏(12.2%)③超自然圏(8.2%)の順であった。(図3)。

頻度をsphereでみると、最頻の生活圏はすべて異なっており、現実的生活圏では社会的・自然的生活圏、回想的生活圏では対人的・自然的生活圏、展望的生活圏では自然的・対人的生活圏の順に多かった(表3)。全体として頻度の有意差が認められた($\chi^2=517.46$, $df=10$, $p<.001$)。

現実的生活圏では、社会的生活圏の出現頻度が最も高いという特徴がみられる。これは地縁圏が圧倒的に高いためであり、Q1~3のいずれにおいても、センターやホームに関連した回答が多くみられた。内容的には、個人的なつき合いよりも、一日を過ごすセンターやホームという場に対するコミットメントの高さを示したものが多かった。2番目に多かったのは自然的生活圏であるが、これはQ1や4で身体的活動や健康維持の活動を、趣味や生きがいとしてあげる者が多かったためである。センターやホームという施設の利用者や入居者の場合、興味や関心が施設という生活の場や健康状態に強く向いていると思われる。

回想的生活圏の特徴は、対人的生活圏が最も高く、また他に比べて自然的生活圏が低いことである。高年群の対人的生活圏は、現実的および展望的生活圏においてはさほど高くないにもかかわらず、回想的生活圏においては非常に高い。これは職業圏と家族圏の出現が多いためである。職業圏はQ4~6のいずれにおいても高く、仕事上のことがらが思い出として語られることが多かった。なお、ここでは女性の家事や家庭生活における仕事、特殊な体験を除く男性の戦争体験や軍隊生活に関することも職業圏に分類した。家族圏はQ4と5に多くみられ、家族のことや家庭生活の充実などがあげられていた。このように高年群の過去回想の内容は、職業圏と家族圏が中心であり、過去の人生をふりかえると、よくも悪くも自我関与の高い思い出は、職業生活と家庭生活の中に見い出されるといふ高年者が多いのだと思われる。しかし、一

方で「特になし」という回答も多く(32.4%)、過去に語りたがらない高年者も多い点が注目される。過去をふり返っても仕方がないという気持ちがあり、一種の防衛的な反応であるように思われる。

展望的生活圏では、自然的生活圏が最も高く、他に比べて内在的生活圏が高い点に特徴がみられる。自然的生活圏の中では身体圏の出現が圧倒的であり、特にQ8と9では健康の問題をあげる者が多かった。何とか現在の健康状態を維持し、死ぬ時にはボケたり長患いすることなく、自分も苦しまず、また周囲にも迷惑をかけずに死にたいというのが高年者の共通の願いであると思われる。老年期においては、心身問題の相関が高く、健康状態は高年者の意識や行動に影響を及ぼす大きな要因のひとつである。したがって、身体圏は他のcircleにも影響する重要な生活圏であり、身体的側面の問題は高年者の未来展望において大きな位置を占めているものと思われる。対人的生活圏の頻度は自然的生活圏に次いでいるが、ここでは家族圏が多い。Q7～

9において、子供や孫の将来に対する期待や不安、あるいは家族のためを思う内容の発言がみられた。高年者の家族志向の高さが反映されたと思われる。また、他に比較して内在的生活圏が高かったのは、失いたくないものとして精神的・価値的な内容があげられ(Q9)、超自然圏の頻度が比較的高かったためである。以上のように、高年群の未来展望の内容は、身体的側面と家族の問題を中心としており、中年群と同様の傾向がみられる。しかし、「特になし」が回想的な生活圏の場合とほぼ同じ比率で出現しており(32.2%)、未来について語ろうとしない高年者も多い。ここでも将来のことを考えても仕方がないという気持ちが反映されており、やはり防衛的な機制が働いているように思われる。

3. 条件別にみた高年群の生活圏

高年群について、回想的な生活圏と展望的生活圏をとりあげ、各生活圏の出現頻度が性や年齢段階、居住環境によってどのように異なるかを検討した。sphereのレベルでみた頻度を表4

表4 条件別にみた各生活圏の出現頻度(高年群)

()は%を示す

		自然的	対人的	社会的	内在的	分類不能	なし
回想的	男性	29(8.8)	168(50.9)	17(5.1)	2(0.6)	4(1.2)	110(33.3)
	女性	41(10.1)	194(47.9)	28(6.9)	6(1.5)	8(2.0)	128(31.6)
展望的	男性	78(23.6)	57(17.2)	37(11.2)	30(9.1)	10(3.0)	118(35.8)
	女性	117(28.9)	92(22.8)	29(7.2)	44(10.8)	6(1.5)	117(28.9)
回想的	Y-O	25(8.2)	174(56.9)	16(5.3)	3(1.0)	5(1.6)	83(27.1)
	O-O	45(10.5)	188(43.8)	29(6.8)	5(1.2)	7(1.6)	155(36.1)
展望的	Y-O	89(29.1)	81(26.4)	24(7.8)	25(8.2)	8(2.6)	79(25.8)
	O-O	106(24.7)	68(15.9)	42(9.8)	49(11.4)	8(1.9)	156(36.4)
回想的	在宅	36(9.8)	173(47.2)	19(5.2)	4(1.1)	5(1.4)	129(35.2)
	軽費	15(8.9)	88(52.4)	16(9.6)	3(1.8)	4(2.4)	42(25.0)
	教養	19(9.5)	101(50.3)	10(5.0)	1(0.5)	3(1.5)	67(33.3)
展望的	在宅	106(28.9)	74(20.2)	32(8.7)	30(8.2)	9(2.5)	115(31.4)
	軽費	44(26.2)	38(22.6)	15(9.0)	24(14.3)	4(2.4)	43(25.6)
	特養	45(22.4)	37(18.4)	19(9.5)	20(10.0)	3(1.5)	77(38.3)

に示した。

(1) 性別にみた生活圏

a. 回想的な生活圏

各生活圏の頻度を sphere のレベルで比較すると、性差は有意ではなかった ($\chi^2=3.71$, $df=5$)。ただし、circle の頻度をみると、男性では職業圏が最も高いが (38.2%)、女性では家族圏が最も高い (29.6%) という違いがみられる。高年群全体としてみると、過去回想の内容は職業圏と家族圏が中心であったが、職業圏が高いのは男性の傾向であり、家族圏が高いのは女性の傾向であると思われる。男性は職業生活に多くの思い出を持っているのに対し、女性では家庭生活の方に思い出を多くもっているといえるだろう。これ以外に目立った性差は認められなかった。

b. 展望的な生活圏

sphere の頻度に性差が認められた ($\chi^2=13.15$, $df=5$, $p<.05$)。男女ともに自然的・対人的・社会的・内在的な生活圏の順に頻度が高いが、男性では「特になし」が35.8%と多いため (女性は28.9%)、各 sphere の頻度は男性の方が低くなっている。高年群の中で比較すると、男性よりも女性の方が未来展望を持ちやすいものと思われる。circle の頻度をみても、男女とも同様の傾向を示しており、未来展望の内容にはあまり性差がみられなかった。

(2) 年齢段階別にみた生活圏

a. 回想的な生活圏

各 sphere の頻度に有意差がみられた ($\chi^2=12.36$, $df=5$, $p<.05$)。最も顕著な差は、対人的生活圏の頻度にみられ、young-oldの方が高い。また、「特になし」の比率は young-old (27.1%) よりも old-oldの方が高い (36.1%)、old-oldの頻度は概して低いが、自然的な生活圏と社会的な生活圏の頻度は、old-oldの方がわずかながら高い。

しかし、対人的生活圏における差を検討すると、どちらも職業圏と家族圏が高く、質的な差はあまりみられない。それは、Q4～6の項目ごとに検討してみても同様である。したがって、

対人的生活圏の差は量的な差であって、過去回想の内容の差ではないと思われる。また「特になし」の反応の比率は、old-oldの方が過去について語る者が少ないことを示しているといえよう。以上からみて、年齢段階による差がみられたが、それはむしろ過去回想の量的な側面の差であると考えられる。

b. 展望的な生活圏

sphere の頻度に年齢段階差が認められた ($\chi^2=20.51$, $df=5$, $p<.001$)。自然的な生活圏と対人的生活圏の頻度は young-oldの方が高く、社会的な生活圏、内在的な生活圏と「特になし」は old-oldの方が高かった。量的にみれば、old-oldの方が未来展望は少ないといえよう。

自然的な生活圏の差は、身体圏の差である。Q8と9において、健康や体力の問題をあげた者は、young-oldの方が多かった。未来展望の内容としては、年齢が高くなるほど身体圏に含まれるものが多くなると予想したが、結果は反対の傾向を示している。old-oldの場合には、ある程度健康や体力の低下は、むしろ当然のこととして受け止められているのかもしれない。しかし、将来の身体的老化や健康の悪化について考えまいとする姿勢が反映された可能性もあると思われる。

old-oldは、対人的生活圏は少ないが、社会的な生活圏は young-oldよりも多い。家族圏・近縁圏・職業圏はいずれも young-oldよりも低い。地縁圏と国家圏の出現頻度はわずかながら young-oldを上回っている。展望的な生活圏において、old-oldの対人的な生活の場への関心は減少を示しているが、センターやホームあるいは国や社会といった社会的な場に対する関心はむしろ増加を示している点が興味深い。以上のように、全体としては old-oldの方が生活圏の出現頻度は低いにもかかわらず、未来展望の内容では、社会的な場への関心が高まる可能性もあることが示された。

(3) 居住環境別にみた生活圏

a. 回想的な生活圏

居住環境による sphere の頻度は有意では

なかった ($\chi^2=10.96, df=10$). ただし, Q4~6の項目ごとに検討したところ, Q5においては sphere の頻度の有意差が認められた ($df=8, \chi^2=23.63, p<.01$). Q5 の回答には, 分類不能なものが一つもなかったため, 自由度は8になっている. Q5 の回答においては, 軽費の対象者に特徴がみられ, 在宅と特養に比べて自然的生活圏, 社会的生活圏が高く, 「特になし」が低かった. 最も顕著なのは「特になし」の比率で, 在宅の37.3%, 特養の32.8%に対し, 軽費ではその半分の16.1%であり, その差は有意であった ($\chi^2=8.42, df=2, p<.05$). Q4と6では, 「特になし」という回答の比率に有意な差がみられないので, 軽費の対象者は, 在宅や特養の対象者に比べ, 過去回想の中に劇的な思い出を持つ者が多いと考えてよいであろう. ただし, それが何に起因するものであるのか, 今回の研究からは明らかではない. これ以外には, 大きな差は見当らなかった.

b. 展望的生活圏

Q7~9においては, sphere の頻度に居住環境差が認められなかった ($\chi^2=12.49, df=10$). 質問項目ごとにみても, やはり有意な差はみられない. また, circle の頻度をみると, 在宅と特養では身体圏・家族圏・超自然圏の順であり, 軽費では身体圏, 超自然圏・家族圏の順である.

軽費の対象者は, Q9 の回答で, 精神的・価値的な内容をあげる者がやや多かったが, 大きな差はみられなかった. 未来展望の内容は, 居住環境によってそれほど大きく異なることはないと考えられるが, これは今回の対象者にみられた特徴である可能性も否定できないであろう.

4. 未来展望の長さ

Q10では, 何歳まで長生きしたいかをたずね, 年齢による回答を求めた, その結果および対象者の暦年齢との差を表5に示した. なお, 表中の0の頻度とは, 「今すぐ死んでもいい」と答えたため, 暦年齢との差が0である者の頻度を示している.

(1) 3群の比較

Q10の回答を3群で比較すると, 有意差が認められ ($F=13.22, df=2/519, p<.001$), 多重比較の結果, 高年群の回答は若年群と中年群よりも高かった. 若年群と中年群の平均値は, 調査時点における日本男性の平均寿命75.6歳(昭和63年7月11日厚生省発表の「昭和62年簡易生命表」による. 以下同様)をやや上回る値であり, 高年群の平均値は, 日本女性の平均寿命81.4歳を上回っている.

各対象者の暦年齢との差を求めたところ, 群間差は有意であり ($F=390.10, df=2/519, p$

表5 Q10の結果および暦年齢との差

		N	何歳まで		暦年齢との差		
			M±SD	範囲	M±SD	範囲	0の頻度
全体	若年群	145	76.1±27.6	30~300	56.7±27.6	8~282	—
	中年群	153	77.1±8.3	60~125	31.5±10.7	6~78	—
	高年群	224	84.0±9.1	67~150	7.4±8.7	0~75	39(17.4%)
	男性	98	86.0±11.8	67~150	9.9±11.4	0~75	11(11.2%)
	女性	126	82.4±5.8	70~100	5.4±5.1	0~37	28(22.2%)
高年群	Y-O	96	80.7±10.0	67~150	10.4±10.3	0~75	6(6.3%)
	O-O	128	86.4±7.4	76~130	5.1±6.5	0~47	33(25.8%)
	在宅	111	83.7±10.1	72~150	9.1±10.4	0~75	12(10.8%)
	軽費	51	83.0±9.1	70~130	6.9±7.9	0~47	10(19.6%)
	特養	62	85.2±6.9	67~100	4.6±4.3	0~18	17(27.4%)

<.001), 多重比較の結果, それぞれの群間に有意差が認められた. 若年群の平均年齢は19.3歳であるが, 回答と暦年齢との差の平均値は56.7歳であり, これは当時20歳の日本男性の平均余命56.5歳に一致する. 中年群の平均年齢は45.4歳, 回答との差の平均値は31.5歳であったが, これも当時45歳の日本男性の平均余命32.7歳にほぼ一致する結果である. 高年群の平均年齢は77.0歳, 回答との差の平均値は7.4歳で, これは当時75歳の日本男性の平均余命(9.4歳)と80歳の日本男性の平均余命(6.9歳)の間の値である. したがって, 回答から暦年齢を引いた値の平均値は, 当該年齢の男性の平均余命にほぼ一致しており, この点が非常に興味深い.

(2) 年代別の比較

10歳ごとの年代別にみた結果を図4に示した. Q10の回答は, 年代につれてわずかずつ上昇するが, 80歳以上の年代で勾配が急になっている. 分散分析の結果, 年代による差が有意であり ($F=142.30, df=6/515, p<.001$), 多重比較の結果, 20代~70代の各年代と80歳以上との間に有意差が認められた.

回答と暦年齢との差は, 年代につれてほぼ直線的に下降するが, 80歳以上の年代で勾配がゆるやかになっている. 年代による有意差が認められ ($F=142.30, df=6/515, p<.001$), 多重比較の結果, 70代と80歳以上との間を除くす

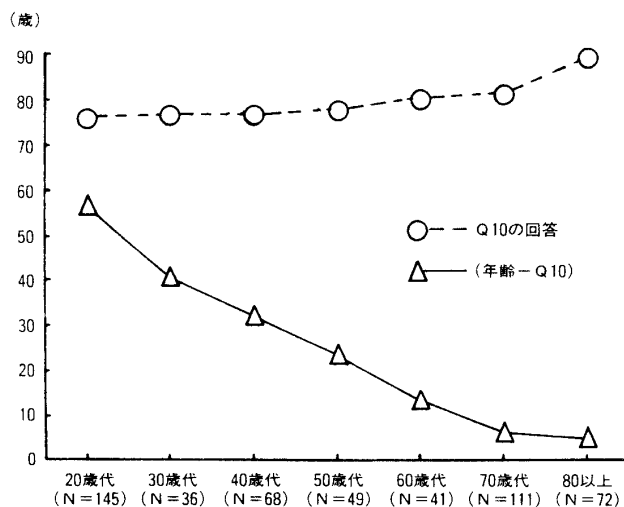


図4 年代別にみたQ10の回答および暦年齢との差

べての年代間に有意差があった.

以上より, 「何歳まで長生きしたいか」という質問を用いた場合, 年齢の若いほど未来展望の長さは長く, 年齢が高くなるにつれて未来展望は短くなる傾向がみられる. しかしながら, その変化の度合いは80歳以上になると異なっており, より若い対象者の回答傾向の延長線上に位置するものではない. 客観的には年齢が高くなることは死が近づくことを意味するが, 主観的にみるならば, 年齢が高くなっても, 死は直線的に近づくと感じられているわけではないといえよう. つまり, 高年群では未来時間展望の長さが短くなるのは確かであるが, 決して年齢に反比例するのではないと思われる. たとえ超高齢であったとしても, 未来時間展望の長さが0になるということはないであろう.

(3) 高年群における条件差

高年群については, 表5に基づいて3要因の分散分析を行ない, 条件差を検討した. Q10の回答に関しては, 性 ($F=9.78, df=1/216, p<.01$) と年齢階段 ($F=25.56, df=1/216, p<.001$) の主効果が有意であり, 女性より男性, young-oldより old-oldの方が平均値は高かった. 居住環境の主効果およびすべての交互作用は有意ではなかった.

回答と暦年齢との差においても, 性差 ($F=15.34, df=1/216, p<.001$) と年齢段階による差 ($F=17.85, df=1/216, p<.001$) のみが有意であり, 女性より男性, old-oldより young-oldの方が値は高かった.

以上からみて, 性別では男性, 年齢段階では young-oldの方が未来時間展望が長い傾向が認められる. しかし, 時間的展望の量的な側面についても, 居住環境による差は認められなかった. 回答と暦年齢との差の平均は, 在宅 (9.1), 軽費 (6.9), 特養 (4.6) の順であるが (表5), 有意差はなく, また交互作用も有意ではなかったことから, 居住環境の差は, 対象者の暦年齢による差であると考えられる. なお, 「今すぐ死んでもいい」という回答は, 男性より女性, young-oldより old-oldに多くみられ, 居住環境

では特養・軽費・在宅の順に多かった。

IV. 全体的考察

本研究では、自我関与が高いと思われることからについて、過去と未来とに分けて自由回答による質問を行なった。過去回想や未来展望の内容を検討するためにこのような形式を取ったが、これは時間的展望の研究にとって、必ずしも一般的な方法ではないと思われる。しかし、高年者について、時間的展望に関連した若干の特徴が見い出された。

回答内容を生活圏に分類した場合、最頻の sphere をみると、若年群においては現実的生活圏、回想的な生活圏、展望的生活圏のすべてにおいて、対人的生活圏が該当する。中年群は、現実的生活圏と回想的な生活圏においては対人的生活圏が最頻であり、展望的生活圏においては自然的生活圏が最頻であった。これに対し、高年群では最頻の sphere がすべて異なり、現実的生活圏では社会的生活圏、回想的な生活圏では対人的生活圏、展望的生活圏では自然的生活圏が最頻である。このことは、年齢が高くなるにつれて、現在や過去、未来の意味づけが明確になってくることを示しているように思われる。つまり、過去に体験したきた時間が長い高年群においては、心理学的な過去や未来が分化しているが、若年群においては、心理学的な過去や未来および現在が、まだ未分化に近い状態にあるのではなからうか。これは、「時間的自我」の発達を示す傾向であると考えられる。「時間的自我」とは、「自己概念に反映される自己の過去から未来へと向かう時間的側面に関する意識内容」⁽¹²⁾である。時間的自我の発現は、青年期初期の第二反抗期の時期からであるとされている⁽¹²⁾。したがって、若年群においてより未分化であった過去回想や未来展望の内容が、中年群、高年群となるにつれて分化してくると思われる。そうであるならば、高年化を時間的自我の発達過程として捉えることも可能であろう。しかしながら、本研究から結論を下すには、そ

の根拠が甚だ脆弱であり、この点については今後の課題としたい。

本研究の主な目的は、過去回想や未来展望の内容を吟味し、時間的展望の質的な側面を検討することであった。しかし、随所で量的な側面にもふれざるを得なかった。それは高年群において、「特になし」という反応が多くみられたためである。この反応からみる限り、高年群は若年群や中年群に比べ、過去回想や未来展望の量・頻度が少ないが、特に未来展望に関しては差が大きかった。回想的な生活圏や展望的生活圏が縮小しているともいえよう。その傾向は、回想的な生活圏については young-old より old-old、展望的生活圏については young-old より old-old および女性より男性において顕著であった。回想の量に関しては、長田ほか (1989) が、一般にいわれているような、年をとるほど昔のことを考えるようになるという傾向はみられないことを報告している⁽¹³⁾。本研究では、高年者において、むしろ回想の量や頻度が減少する傾向が示された。また未来展望に関しては、Kastenbaum (1963) が高年群は青年群よりも未来の広がり短いことを示し⁽¹⁴⁾、Cameron (1972) は、年齢とともに未来志向的な思考が減少し、現在志向的な思考が増加することを見出ししている⁽¹⁵⁾。本研究の結果も、同様の傾向を示したといえよう。これらから考えるに、高年者は、決して過去の時間に生きているのではない。むしろ過去や未来について考えず、ひたすら現在の時間を生きるという姿勢があるようにも感じられる。防衛的であり現実逃避的であるかもしれないが、それも適応行動のひとつであると思われる。近ごろでは、reminiscence therapy として、高年者に対する過去回想の臨床的応用も行われているが、適応に及ぼす回想の効果については研究者によって結果が異なり、まだ不明確な点が多い。過去をふり返らないことも、適応行動であるとするならば、臨床的応用においては、慎重な配慮が必要であると思われる。

本研究においては、いくつかの問題点があげられる。現在・過去・未来について3問ずつの

質問項目を用意し、自我関与の高いことがらについてたずね、その結果を生活圏に分類した。しかし、現在・過去・未来に関する質問が同質であったかどうかは疑問である。質問の中には、ある特定の生活圏を出現させやすい項目があったかもしれない。また、未来展望の量的な側面に関して、自由回答の結果からは高年群の性差は、男性の方が量的に少ないことを示したが、Q10の結果では逆に男性の方が未来時間展望が長いという傾向がみられた。これは、単に年齢による回答を求めるか(Q10)、言語表出を求めるか(自由回答)という方法上の違いにもよると思われる。一般に、面接を用いた場合には、発話量の問題や面接者との対人関係の問題が関与してくるが、そのような点が影響した可能性も考えられる。

本研究は、あくまでもひとつの試みであった。以上のような問題点を考慮して、さらなる研究が必要であると思われる。

注

本研究は、Kawasaki (1989)⁽⁹⁾において報告したデータの一部を用い、まったく異なる観点から別の分析を試みたものである。

引用文献

- (1) レヴィン 猪股佐登留(訳)「社会科学における場の理論」誠心書房, 1979, p.86.
(Lewin, K.L Field Theory in Social Science. N.Y. : Harper & Brothers, 1951)
- (2) Hultsch, D.F. & Bortner, R.W. Personal time perspective in adulthood: a time-sequential study. *Developmental Psychology*, 10, 1974, 835-837.
- (3) 都築学 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 1982, 73-86.
- (4) Butler, R.N. The life review : An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 1963, 65-76
- (5) 三島二郎 Mental distance についての基礎的研究 I 学術研究(早稲田大学教育学部), 27, 1978, 23-36.
- (6) 三島二郎 Mental distance についての基礎的研究 II -または行動形態論について- 学術研究(早稲田大学教育学部), 32, 1983, 29-42.
- (7) レヴィン 外林大作・松村康平(訳)「トポロギー心理学の原理」生活社, 1942, Pp.33-53. (Lewin, K. Principles of topological psychology. N. Y. : McGraw-Hill, 1936)
- (8) ジェームス 今田恵(訳)「心理学(上下)」岩波文庫, 1939, Pp.216-267. (James, W. Psychology : Briefer course. N.Y. : Holt, 1891.)
- (9) Kawasaki, T. "Living-sphere" in different age groups : Toward a study of self-consciousness in the aged from the standpoint of "living-sphere". *Journal of Human Development*, 25, 1989, 19-23.
- (10) Wallace, M. Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 52, 1956, 240-245.
- (11) Cottle, T.J. The location of experience : a manifest time orientation. *Acta Psychologica*, 28, 1968, 129-149
- (12) 守屋国光 発達の観点からみた老年心理学の使命 老年心理学研究, 3, 1977, 1-13.
- (13) 長田由紀子・長田久雄・井上勝也 老年期の過去回想に関する研究 I 老年社会科学, 11, 1989, 183-201.
- (14) Kastenbaum, R. Cognitive and personal futurity in later life. *Journal of Individual Psychology*, 19, 1963, 216-222.
- (15) Cmaeron, P. The generation gap : time orientation. *The Gerontologist*, 12, 1972, 117-119.